

# 清水紫琴研究

中山 和子

はじめに

紫琴清水豊子は、北村透谷と同年1864年（明1）の生まれである。詩人思想家としての透谷の文学的名声にくらべるなら、紫琴のそれはあまりにも微弱なものである。わずかに小説「こわれ指輪」「移民学園」などが一部に知られていたにすぎない。最近になって、不完全ながら全集も編まれ<sup>(1)</sup>、評伝<sup>(2)</sup>や研究論文も書かれ再評価の動きはあるものの、本格的紫琴論はまだこれからである。

紫琴は北村透谷と同時代を生き、女ながら自由民権の思想と運動とにかかわることで、日本の近代化の過程の排除し、切り捨てていったものを明らかにし、明治近代の欺瞞の鋭い批判者でありえたことで、透谷とほとんど同位にあった女性である。

紫琴より一步早く自由党激化事件にめぐり合い、運動を離脱した透谷の精神の「苦獄」と、立憲自由党時代に負わされた紫琴の「心中の苦」とは同じものではないが、紫琴が女であることによって強いられた苦悩は、透谷にまして格別なものであった。

藤村の『春』を読むものは、透谷の左腕に「ざくろ」の刺青のあったことを知るであろう。自由民権時代のそれが消えぬかたみであった。大井憲太郎のひきいる大阪事件（1885年・明18）の末端に関係し、資金調達運動から脱落した裏切りの後ろめたさと、情況総体にたいする直観的齟齬の恐怖とが、透谷の「苦獄」を形づくっていたが、大井憲太郎は清水紫琴にとっても決定的な存在である。消えぬかたみは「ざくろ」の刺青の比ではなく、紫琴は大井の「私生児」を生んだ女性である。それは、従来考えられてきたような「変愛」の結果ではない。人生相渉論争をたたかい、「内部生命論」へと飛翔する透谷文学の対極に、往年の女傑は「家内重宝録」を書くことになった。

関西における自由民権、女権獲得の運動時代から、『女学雑誌』の才気縦横な記者時代にいたる、すぐれて先駆的な評論、今日のフェミニズムにも直結するその評論をあらたに読み直しながら、紫琴の文学史的位相をまずあきらかにしてゆきたい。そこには女である故に透谷を超える視界が明らかにひらかれていたが、それ故にひきうけた残酷な運命があった。「苦しみて腸も裂けなんとす」というその懊悩、のちの結婚生活のなかで強いられた無念の沈黙、そうした精神の深みに迫ることで、さらに残された小説作品の再検討を試みたい。明治二十年代の文学表現に紫琴が問題提起したものは何であったか。ちなみに紫琴は樋口一葉に四歳の年長であるが、紫琴の文章の再評価は文学的資質のまったく異なるこの二人が、それぞれ明治二十年代を代表する優れた女性の書き手であったことを証すはずである。

## 第一章 女権思想家としての紫琴

### 岡崎とよの時代

「母はその死にいたるまで、ついに自己の過去をわたしたち兄弟にかたならなかった」と古在由重氏が回想している<sup>3)</sup>。しかし、没後、大切にしまわれていた手箱のなかから、古在由直が紫琴にあてた一束の青春書簡と、一枚の写真がでてきたという。

この写真は、家永三郎『革命思想の先駆者——植木枝盛の人と思想——』（岩波新書 1955.12）においてはじめて世に紹介されたもので、植木枝盛、富永らく、石田たかとともに写された紫琴の若き日の姿である。この時二十二歳、前髪をおろしたモダンな束髪で紋付の和服姿。ふくよかに中高の顔立の美しい、大柄な感じの女性である。

新宿中村屋の女主人相馬黒光は、紫琴のもっとも早いかつ優れた紹介者であるが、その『明治初期の三女性』（厚生閣 1940.9）のなかで、女壮士といわれた紫琴は、「花の如しといひたいやうな美し」い人であったと語っている。上京し、叔母佐々木豊寿の家にいた時分その容姿に見惚れたものだということである。

年譜と照合すれば、先の写真は植木、富永らと中江兆民を訪れた1889年（明22）1月6日の二日後である。どんな思いをこめて紫琴はこの一葉を保存していたのであろう。

紫琴の名が『植木枝盛日記』（高知新聞社刊）に最初にあらわれるのはさらにさかのぼり、前年1888年（明21）4月23日である。この日植木を奈良元林院町松正亭にまねいての懇親会に出席している。この頃、地租軽減、言論集会の自由、外交刷新をめざしたいいわゆる三大事件建白運動が盛んになっていた。自由党解党後、郷里の高知に帰って活動していた植木も、反政府運動の昂揚とともに高知を発った。その東上の途中の会見である。当面する三大建白はむろん、大同団結や、普通選挙、家族制度改革論なども縦横に話しあわれたことだろう。

二度目に紫琴の名が出るのは同年秋11月13日である。

「雨。岡崎とよ子女史に会す。南禅寺に往観。同処山上疏水工事を視る。永観堂に紅葉を観る」とある。

当時の紫琴はじつは清水豊子ではなく岡崎とよ子であった。最初の夫、弁護士岡崎晴正の妻であって、植木と最初の会見の席には、岡崎晴正も同席している。紫琴が嫁して岡崎姓となったのは1885年（明18）のこととされているが、この最初の結婚のてんまつは、いまだはっきりしないところがある。「不本意なる結婚」（川合山月宛書簡 1891年（明24）5月28日）という紫琴自身の言葉がある。しかし、のちの小説「こわれ指輪」（1891年（明24）1月『女学雑誌』新年附録）にあるように、親のいいなり見合もせずに結婚し、夫の重婚にもひとしい女性関係に傷つく、という筋書きが、そっくりそのままあてはまるかどうかは、問題であろう。

竹末勤の調査<sup>(4)</sup>によれば、岡崎晴正は「興和会」(寧良交詢会)という奈良の 代言人中心の 知識人グループの中心的メンバーである。1887年(明20)11月26日、奈良瓦堂劇場において、二千の聴衆を集めた演説会を催し、晴正は「県治の美を見んと欲せば議員其人を選ぶべし」紫琴は「女学校の設立を望む」というテーマで、それぞれ演壇に立っていたことが明らかである。

おそらく紫琴を最初に刺激してこうした政治活動へみちびいたのは夫晴正であろう。紫琴は京都府立第一高女出身であり、ひとときわ頭脳明晰な女性だったから、新刊の書籍、雑誌などに常に目を通す習慣があったろうし、世の中の動きにも注意していたと思われる。しかし、もし夫晴正の同意がなければ、当時の結婚した女性に、このような公の活動はほとんど不可能だったと思われる。湘煙岸田俊子が、民権運動家の紅一点として、その麗しい姿形とともに演説の名手として鳴り響いたのは1882~3年(明15~6)のことである。こうした女の新しいイメージのあたえた影響もそこに加わっていたかも知れない。ともかく、以後、奈良東寺林町英学会場(88年2月25日)、奈良錦劇場(3月10日)と学術政談演説会が開かれ、どれにも岡崎とよは出場している。こうして紫琴は夫晴正とともに、奈良民権家、大同派の人々との交流のなかで活動し、先の植木との懇親会にも晴正ともども出席したわけである。植木は興和会発行の『興和之友』の特別寄稿家でもあった。

そのかぎりでは、岡崎夫妻はよそめにはおしどり活動家と見えていたのかも知れぬ。しかし、『興和之友』発表の89年(明22)2月15日の日付のある紫琴の短歌には「清水とよ」と署名されている。歌はたとえば次のようなものである。

水辺柳

かつら川かはそひ柳枝たれて

かたえは底の玉藻とぞ見る

かつら川の水辺であるところから、紫琴がすでに西京に移ったらしいことが知られる。水中にしないでゆらぐ柳の枝を、玉藻にまがうか、と見つめる作者には、二身を経るの思いがからまるのであろう。十一首のうちではよいほうの歌である。

この少し前の1月30日に、紫琴は京都市座において「女権拡張の方策、敢て日本の未婚の令嬢諸君に告ぐ」という演説を行っている。聴衆千八百、盛況を極めたという。演説内容は紹介されていないが、タイトルから見れば、自己の離婚をふまえて、とくに未婚女性への熱い要望がなされたものと思われ、これが「離婚後第一声<sup>(5)</sup>」だと推定されている。しかし、この演説者氏名を岡崎とよと発表した新聞もあって、(日出、東雲 1・29)当人の意識の上では北田説が妥当するかも知れないが、手続上離婚がいつだったかは確定できていない。ともあれ、この離婚原因を「こわれ指輪」にある程度類似の事件(二重結婚)と推定することは可能であろう。「こわれ指輪」の女主人公は民権活動家ではさらさらしないし、相手の男性にも民権家の面影などはない。世間普通の夫婦男女の関係が設定されている。しかし、そういう世間並みの事件が、民権の理想を唱える夫のうえにおきた場合の、紫琴の失望と屈辱とは、いっそう大きかったはずである。紫琴の女権論を強く鍛えたものには、おそらくこうしたもっとも身近なモチーフがあるものと考えられる。そして、離婚にまでまっすぐ踏み切らせた要因に、植木枝盛というあらたな先導者の出現があったことはまちがい

ないだろう。従来からこの二人は「相思の仲」という噂もある。

先の植木日記のなかの雨の南禅寺風景など、そんな想像をかきたてるだろう。植木と紫琴とはしばしば会い、時に毎日会ったりすることもあった。しかし、岡崎とよ時代の紫琴を女権論者として急速に成長させるのに植木枝盛の影響があった、ということ以上の臆測を私はさしひかえたいと思う。というのは、次のような紫琴の告白があるからである。ここに恋愛体験の影はない。

妾は生れて以来、淡泊なる（冷淡には非ずと雖も）家族に生長し、母の愛を除きては父も兄弟も何れも他の温き家族の如き充分の熱愛を顕さざるものの如くなりしを以て、愛てふものは他の諸性に比して殊にその発達を遂げざりき故に天性殆ど愛てふ性分なきものの如くなり居し処へ不本意なる結婚をなし、又其愛の包芽を発達せしむるによしなかりし為め益偏僻なる冷情なる人間となり終せ、世にも人にも厭はるゝ身となり又自らも世を不平不幸なるものとのみ思ひ誤り居しに、昨春来思掛なく巖本先生によりて主の御前に導かれ……

（1891.5.28 付書簡、川合信水、末次政太郎宛）

### 女権論の主体

植木枝盛『東洋之婦女』は1889年（明治22）9月にいたり、佐々木豊寿を発行人として単行本（定価四拾銭）にされたが、その内容は高知の「土陽新聞」に発表された「男女及夫婦論」「婚姻論」「婦人女子社会の交際」「婦人女子将来の天地」の四篇を編集整理したものである。

植木の家族制度改革論は戦後になってはじめて、家永三郎によってその全貌が紹介されたが<sup>(6)</sup>、きわめて卓抜なものであった。たとえば、

「親は必ず兒子を養育して一応独立するまでに至らしめるべからざるの本分あれども、子は必ず親を養はざるべからずと云ふ天地の真理は存せざるがごとし」という親子独立の論。

「此世に生れ来る者は、長男たるにもせよ、末子たるにもせよ、孰れも同等の人間なり」「兄弟に相続の権利を与ふると共に、姉妹にも之を与ふるものと為す」という財産の平等分割相続主義。

「家にして必ず戸主あるは、抑も専制政治の小模形」という戸主、家父長制度の解体論。

「夫婦は則同等の男女が同等を以て相ひ組織する一会社」、古来の夫婦とは「夫は主君也、婦は下婢也」「淫夫と賤婦の耦居する所たるのみ」とする夫婦男女同等同権の論。

「世の婦女達の第一に勉むべきは、学問教育」「女権」の拡張、「参政の権利」の獲得、「職業の進取」「社会の交際」「自尊自重の精神」など女性の地位向上論。

民法上の女子無能力、刑法上の夫婦不平等、とくに妻の姦通のみの一方的処罰、相続法上の女子無権利など、一切の法的権利の男女平等論。

「一夫一婦の大倫」の堅持。「蓄妾の習慣」のごときは「禽獣」と同列とみなす「廃娼」論。

以上要するに、家父長的家族制度を解体し、平等な男女の結合による近代的小家族制度の創出を主張しているわけであって、「理論の徹底的な」と、論旨の包括的なものにおいて、前後に例をみ

ない壮大な家族制度改革論<sup>(7)</sup>」だとされている。

そのような言説を、著者自身の口から紫琴は身近に聞くことができたわけである。まして植木は弁舌さわやかな人であった。紫琴の飛躍的成長は当然である。紫琴の評論処女作は植木の『東洋之婦女』序文である。

「十九世紀社会の問題は女子の問題なり、十九世紀文明の歴史は女権拡張の歴史なり」という冒頭には、当時、女権論にあらためて目醒めた紫琴の、強烈な問題意識をみることができるだろう。

『東洋之婦女』に序文を寄せた十七名の女性たちのうち、紫琴の論がもっとも格調高く、かつ論理明晰である。

「如何にして女権拡張すべきや、いかにして男尊女卑の弊あらたむべきやの点に至りては、各意見のあることと存候得ば、通読の榮を得ざる以前にありて其書の是非如何は予知しがたく」という先輩すじにあたる岸田俊子（当時中島信行夫人）の傍観的な見方にくらべるなら、若い紫琴の熱気は新鮮である。岸田は紫琴に5歳（1861年生れとすれば7歳）年長であって、その「同胞姉妹に告ぐ」（1884、5～6「自由の燈」）は民権期の女権論を代表する評論とされている。かつての岸田の鋭鋒を、いま若い世代が変ってになおうとしている如くであり、そういう歴史のつなぎ目を、二人の序文がよく示している。紫琴はさらに次のように述べている。

平生政府に向かつては自由を渴望しながらも、その人一家の内に在りては縦に妻子を抑圧せんと欲する撞着家もある中において——男女同権の真理に適すると知りながらも自己が便宜のために男尊女卑説を賛成する偽学士もある中において、先生の如きはその身男子の社会に在るにも拘はらず、一に纖弱なる婦女の枉屈を愍み、断然として婦人保護の大任に当られんとするなり

岸田俊子もまた、かつて、男尊女卑の観念にたいする徹底的な批判をおこなったうえで、男女平等を唱える民権家自身の男子専制を問題にしていた。国会開設期をひかえた時期の紫琴の論は、その岸田の女権論の原論的な展開をより多く実践的レベルに比重をかけ一歩進めていくことになる。男女平等を唱え、ともに運動してきたはずの夫の現実の「撞着」に傷ついた、紫琴のモチーフがやはりそこにあるだろう。『東洋之婦女』一卷に指し示された方向は、この時二十一歳の紫琴に盤石の支えであったと思われる。

しかし、紫琴は「断然として婦人保護者の大任に当る」植木先生のもとで、保護される者の位置に満足したのではなかった。紫琴は同胞姉妹に呼びかけ「この書を以て婦人社会航海の灯台とし」「東洋の歴史を一新せしめ、おおいに東洋の天地を一変せしめば快もまた快ならずや」と結んでいる。紫琴の凜たる自立の気概は、同年の末に執筆されたものらしい評論、「敢て同胞兄弟に望む」に結晶している。二十三年国会開設を待って、胸中「愉々快々」の同胞男子に訴えたものであるが、そこには次のような一節がある。長い引用をあえてしてみよう。

我が兄弟諸氏よ、君等はこの自由の幸運を得ながら独りその楽を享けんとせらるるか、はたまた我が姉妹等と共に、自由の園に遊ばんと欲せらるるか、妾等が姉妹へ政府の外別に各々の小君主を戴けり。この小君主へある狭隘なる場所において専横を極め、我が姉妹を苦しめおれり。ここにハ法律もその効を及ぼさず、真理もその跡を斂め滲漚たる黒雲その上を覆へり。屈柔従容として耳あるも聴かざる如く、眼あるも覩ざるが如く口あれどもあえて開かず、唯々諾々御無理御もつとも唯命是從へバ安寧なり。もし一朝その意に逆へバ霹靂一声たちまち頭上に落ち、はなはだしきに至りてハ保安条例と同一の効を有する三行半の律令を示され、かぜん郷里に放逐さる事あり。その理由を問へバ唯治安否和合に害ありといふに過ぎず。あに咄々怪事にあらずや、時にあるいは一言もってこれに忠告するあれば、曰く両婦女何をか知らんとその言論の自由を得ざるや概ねこの類なり。誰か知らんこれら専制君主国の君主を気取りおる人々へただ裏店の八公、熊公に止まらず、政府の抑圧を厭ひ、平素平民主義を採るところの志士もあり、廿三年国会開設の暁ニハ国会議員たらん事を予期するの紳士もあるを憶ふに、これらの人々ハ必竟人権の重んずべきを知ればこそ自由を主張するならん。立憲政体を企図せしならん。しかし人々とハ男女を概括するの名称なるハ万々知悉するところならん。しからば則ち男権女権に論なく共にその権利を拡張するハ当然ならずや、今一步を仮して論ぜばよしや女権の拡張を計るまでニハ至らずとも、これを侵害するの行為ハ勉めて避けざるべからざるにあらずや。しかるに今得意然揚々乎として弱者の肉を食ひ我が姉妹の纖弱に乗してその抑圧を逞ふせんとするこれあに諸君のいわゆる男子らしき行ひならんや。

(中略)

我が兄弟は我が姉妹よりも高等の教育を受け、あつたはる議論家もあり奥妙の理を極めたる大識見家もありながら、かくのごとく誤りたる論理を是認さるハ、便宜のためか、私情の故か、もし婦女は器械なり玩弄物なり故に汝等の権利は例外なりといふにあらば、妾また何をかいはん。しかれども妾等姉妹もまた靈魂の有るあり、いづくぞ久しく鬱々としてその専横を忍ばんや。もし今にしてこれを改めずんハ革命の乱あるいハ無きを保し難けん。……諸氏の脳裏に印したる旧慣を脱せざる限りハ二十三年国会の開設も妾等姉妹において何かあらん。しかれどもまた諸君の心一つにて妾等姉妹は、今日ただいまにても自由の民となるを得べし、何ソ三百有余日の長日月を俟つを要せんや。

妾等は一国の政事に参するよりも前に一家の主権に与んと欲するものなり。

烈々として不屈な論調である。女権論者としての紫琴の主体が、ここにあざやかに確立している。岸田俊子は実質において男子読者を想定しながら「同胞姉妹に告ぐ」というように、女性に向けて訴えた形であるが、紫琴は「敢えて同胞兄弟に望む」と正面からの挑戦である。

家庭内の「小君主」である男子の専横が、「保安条例」と同列であること、もしその専横が改められぬかぎり「革命の乱」もありうるだろう、というのはたんなる比喻ではない。女にとって目前

の家父長支配が、国家権力にひとしい専制権力なのだ、という痛切な認識にはかならない。「戸内と戸外においてその主義を豹変する」ような男子政事家のものであるかぎり、待望久しい国会の開設など、女にとって何事でもありえない。「妾等は一国の政事に参するよりも前に一家の主権に与らんと欲するものなり」とは、社会体制の最下流に封じられたものの解放を求める訴えである。

二十三年の国会開設が明治日本の近代の虚妄を象徴するものであることをよく承知し、いっさいの幻想をいだかなかったのは、北村透谷であった。透谷は民権運動末期の困民党蜂起と、その弾圧の惨状を身近に体験することにより、明治近代の体制の排除した最下流の貧民たちの痛苦を、その柔らかな感性に刻印した人である。

君知らずや、人は魚の如し、暗らきに棲み、暗らきに迷ふて、寒むく、食少なく世を送る者なり。家なく、助けなく、暴風暴雨に悩められ、辛うじて五十年の歳月を踏み越ゆるなり。

「時勢に感あり」(1890. 3. 8「女学雑誌」)

紫琴の評論はこのように鋭い文学的表象をもたないけれども、人間として同等のはずの権利を剝奪され、最下層に抑圧され周縁に排除された女の位相が、ここにある水底の闇の位相と共鳴しうる可能性において、明治近代の擬制の批判者でありえたのである。

そのことは、紫琴がこの頃すでに部落差別に関心を示した先駆性によって証明されるであろう。竹末勤によれば<sup>(8)</sup>、紫琴は京都府紀伊郡柳原荘の平等会に出席(1889. 6. 2)し、人口四千余の部落民の自主的改善をめざす平等会の第一回集会に「幻燈数葉を映じ……二三の人々俗語を以て之を講」じた、その仲間に入っている。同じ頃、「社会平権の通義に基づき自主自由」をかかげ真理会を興した、奈良の部落にも遊説したことは充分考えられるという。

人間としての平等、男と女の平等を根源的に追求しようとした紫琴が、社会の最低辺に理不尽にも疎外された人間たちに、率直な共感をいだいたことはまちがいない。のちに論ずることになる小説「移民学園」が、部落の生活の描写において生彩があり、部落出身の身の上を知らされた女主人公が、さほど衝撃をうけないこと、一篇が部落解放の実現という希望的テーマをもつことなどに、この時代の紫琴を見ることができだろう。

人類の半分、社会の半数を占めるはずの女の無権利という不当さを、いわばゼロ地点から告発することで、紫琴が自己確立したことがここに明らかである。まもなく、第一回衆議院選挙において当選し、自由党国会議員として院内に活動する植木枝盛と紫琴との間に、亀裂の生じる予兆はすでにあった。しかし、まだしばらくは紫琴にとって、植木枝盛は必要な先導者であったらしい。

## フェミニズムの先どり

1889年(明22)1月19日付、紫琴にあてた植木書簡が残されている<sup>(9)</sup>。それによれば植木が紫琴

の論文に朱を入れ親切に発表の世話をしていた、ということである。日時から推定すればその論文は先の「敢えて同胞兄弟に望む」ではないかと思う。これは現在の全集に収録されている文章であるが、じつはこれと同じ題名で「興和之友」(1889. 3. 25)に掲載された論文(全集未収録)が存在するからである。

二つの文章をひきくらべてみれば、植木の助言と思われる方向がわかって面白いが、改稿によって、これ程精彩を欠いてしまった文章もめづらしい。

「きのふと云ひけふとくらして飛鳥川流れてはやき月日なるかな」という冒頭の月並な一句からして、先の全集収録文の、はぎれのよい弾力ある文章と縁がないが、論旨の比重に大きな相違がみられる。前者はひとくちにいうなら、家父長的家族制度と敵対することが、女子解放の焦眉の問題であるという論旨であった。その旧慣の廃止なくしては「二十三年国会開設」何かあらん、と断言していたのである。「興和之友」発表文は次のようなものである。

君等が曾てより自由の尊ぶべき事を立説し人權の重んずべき事を唱道し之れが為にして立憲政体の興さるべからざるを論議し或は建言し或は請願し孜々として其事の為に勉められしものハ豈に夫れ男子のみの自由を尊ぶべしと為し男子のみの権利を重んずべしと為し男子のみをして立憲政体を組織せしめんと覚悟せられしものなる耶思ふに必しも然るにあらざるなり諸君にして既に己に自由の尊ぶべきを知り人權の重んずべきを知り以て立憲政体を興さん事を企画す安んぞ男子のみは自由をも尊ぶべく権利をも重んずべし女子は則ち然らず男子のみは政権にも与るべし女子は則ち然らずと為すが如きの撞着矛盾する事あらんや

(中略)

今其二十三年国会開設の期に至らんとするに当りてハ猶ほ且つ諸君の独り男子のみを以て立憲政体の社会に榮譽あり幸福ある人と為る事を期せらるゝのみならず併せて女子をも諸君男子たる者と同じく立憲政体の社会に榮譽あり幸福ある人と為さしむるやう企図せられん事を希望せざるへからざるなり……是れ唯だ吾々女子の為に之を希望せざるべからざるが為にあらず実に自由の先唱者たり民権の先唱者たり立憲の先唱者たる男子諸君の為に之れを希望せざるへからされハなり<sup>(10)</sup>。

要するに男子のみの立憲政体参与、女子参政権排除の不合理にたいする抗議であり、とくに民権運動家内部にむけられた抗議でもある。当然な条理を説いて冷静であるが、しかし、草稿の「一国の政体に参するよりも前に一家の主権に与んと欲す」といった、あの生きのよい反逆性が殺されている。「国会の開設あるに就ても女子をは是を排して独り男子のみ其榮譽を私し其幸福を擅にせんと欲し女子をは猶ほその奴隷の境涯に存在せしめて政府の外なる一小君主の権威下に匍匐せしめ屈従せしめ」というように、一家主権の問題は継承されてはいるが、比重はまったく一国参政の権利にかかってしまった。

全集収録文書きなおしの過程で離婚にふみきっていた紫琴にとって、それが一種の「革命」の断



行であったため、屋内より屋外の自由を求め、国政次元の同権実現を重視したのである。収録文の方に「女と男の現状変革への女の志情が奔る」良さを認めるけれども、これもひとつの「新たな前進」だろう、というふうに見る意見もある。しかし、紫琴の思想の発条となったものを一個の離婚体験のみに収斂させる必要はないだろう。これは自由党内部での先進派、婦人参政権論者としての植木枝盛の勧告にしたがった改稿ではないか。その意味で「前進」というよりは紫琴の「妥協」の産物だと思われる。この文章の索然たる味わい、内発性のなさがそのように推測させる。そして、現在の全集本文のほうが、「女権論史上に与えた影響は比較にならないほど大きかっただろう」（北田）という判断はやはりまちがっていないのである。

男性優位は社会経済体制の変革と関係なく存在する、というのが今日のフェミニズムの常識である。社会主義こそ男女差別をなくするものと考えていたボーヴォワールが、『第二の性』を発表してから二十余年後に語った言葉は次のようなものである。

『第二の性』における私の立場の変更をもたらしたのは、階級闘争そのものは女性を解放しないということです。共産党であれ、トロツキスト、毛沢東主義者であれ、その中には常に女性の対男性隷属があります」だから女権論者にならなければならぬ、と決心したというのである。

「一国の政事に参するよりも前に一家の主権に与らんと欲す」と宣言した紫琴のあたらしさは、やはり刮目すべきものであった。社会革命の幻想から醒めた今日のフェミニズム、階級支配より性支配を根元の矛盾としてとらえるフェミニズムを先どりしていた感がある。

当時、自由党議員となることを目指していた植木の理論の粋を、紫琴はいつか、あいまいに受け入れたかたちであるが、しかし間もなく紫琴は院内自由党の活動に、皮肉な冷嘲をあげせる人となるのである。

紫琴の民権思想における、“女”に徹した根元の戦闘性を、女権論においては屈指の論客だった植木枝盛も見抜きえなかったといえるだろう。

### 景山英子とともに

明治憲法発布による大赦出獄のため、1880年（明治13）2月21日、民権家一同は大阪に集結し、いわゆる大阪事件被告たちの盛大な歓迎会を催している。そのため植木が奔走したのは無論であるが、紫琴もまたすでに主役をつとめるほどに成長していた。当時民権女性として有名な景山英子、のちの福田英子と紫琴とはここで密接なつながりをもつことになる。

英子は紫琴について「姉妹の如くなりし」（『妾の半生涯』）と書いているが、紫琴もまた「景山さんとはほんとに仲がよかったんだよ」と、いくどか語っていたという<sup>(11)</sup>。山口玲子の『泣いて愛する姉妹に告ぐ——古在紫琴の生涯——』（草土文化 1977.8）の段階では「すれちがい」というように理解されていた二人の接触が、近年ではかなり明らかになっている<sup>(12)</sup>。

大井憲太郎、小林樟雄、景山英子らを迎えた一大祝宴の様子が報じられ、「（東雲新聞）2/14」「清水豊子等婦人も数名会場に列し酒間にも互ひに旧を談じ新を話し」云々とあって、紫琴も重要

な役目を果たした様子である。大阪の新生楼に「女傑、景山英子」の出獄を迎える女だけの祝宴には、紫琴が発起人となり、総代として演説している。(同2/26) この時二十三歳の紫琴は、もはや立派に関西の民権女性を代表する活動家だったわけである。

この祝宴で大阪に女子の大団結を謀り、同主義の女子懇親会の毎月1～2回開催が提案され賛成をえている(同3/1)。紫琴はすでに京都に婦人奨励会を組織し、雑誌発行を計画中であったから(同2/20)、京、大阪をふくめた大団結の組織づくりが着想されたかも知れないし、その後二人を中心に月刊雑誌「女権の魁」の発行準備が進んだ(「土陽新聞」4/11) というのも紫琴のプランの具体化だったかも知れない。紫琴は岡山で開催される景山英子、小林樟雄歓迎会に出席のため、英子の岡山帰郷に同行している(2/26)が、英子のほうは上洛すると、京都木屋町の「清水豊子方に止宿」し、「學術演説会を開かんと日々奔走」(5/18)中と報じられている。まもなく二人は同伴で大阪の「東雲新聞」を訪れた模様で「何か実業上の計画をなし居れるよしにて当分の中は滞阪すると」(同5/23)という記事がある。実業上の計画は何か具体的にはわからないが、英子の志向などから推して女学校設立のプランであったかもしれない。当時「浪華商話会」というグループで滞阪中の彼女たちを招いた記事もある。「浪華商話会にては昨今会員も百余名に及びたるを以て不日四区内に一ヶ所づつ(会員の居宅を充て)の支部を設け一層拡張を謀る由なり又同会にては今度景山英女、清水とよ女、景山氏と獄中にて交りを結びたる嶋津まさ女を聘して演説会を開き女子にのみ傍聴を許し大阪婦人の進歩を謀るとの事」(同5/28)といったふうであって、ともかく以上のように、出獄後の景山英子と紫琴とはかなり親密に共同行動をとっていることが明らかである。

当時は国会開設を次の年にひかえて、大同団結運動が非常な勢いで全国にひろがりつつあった。地租軽減、言論集会の自由、外交の確立を要求する幅広い政治運動に、出獄後の大井憲太郎も直ちに参加している。長い獄中生活以来の大井と英子との関係は一層強まり「二人は、表面、同志として、各地を一緒に演説してまわりながら、お互の愛情と結びつきはそれを通じてますます深まっていった。」英子25歳、大井47歳、「まさに英子が得意の絶頂にあったところである。」<sup>(13)</sup>

ところで、大井には「明治十七年以来発狂して人事を弁え」ぬ妻があったが、急には離縁しがたいという理由で、英子は「内縁」の関係にあった。しかし、この時期英子とかなり親密であった紫琴が、英子と大井との関係を知らないという可能性はまずないだろう。翌年3月に大井の子供を出産することになる英子は、この年の4月～5月頃懐胎したはずであり、二人の親しい連帯は、ひきつづき一夫一婦建白運動においても保たれていたのである。

紫琴は早くも1889(明22)年4月に、一夫一婦建白をしようと賛同者を募集しはじめたようだが(「関西日報」8/7)<sup>(14)</sup>、6月6日の東雲新聞には、「大阪婦人の建白」の見出しで「当地の某々女等ハ彼婦人矯風会の意見を賛成し左の如き主意を以て一夫一婦の事を建白せんと頻りに同志を募り居るよし」という記事がみられる。同時に東京婦人矯風会の湯浅はつの手になる「倫理の基の要旨」全文も掲載された。「浪華商話会」の記事は5月28日であるから、紫琴の演説をきいたはずのこのグループが有力な母胎だったかも知れない。

その後7月30日、京都木屋町の紫琴宅に英子が投宿し、一週間程滞在している。目的は「一夫一

婦建白に付同感の女子を遊説する」(「京都日報」8/1)ためであった。英子の支援もあって8月上旬には賛同者6,70名に達し建白書ができあがった。8月下旬賛同者はさらに120余名にのぼり、8月29日、紫琴は建白書の元老院進達を京都府に出願した。こうした紫琴の活躍が、「京都の女壮士」(「前同」8/22)という評判をとることになったのである。なお、これを見れば悪阻がひどくなり懷妊の身を秘するため、英子は7月下旬東京へ逃れた(『妾の半生涯』)とされているが、時期にくらか記憶ちがいもあるようだ。少なくとも8月上旬まで英子は紫琴と共に活動したらしい。紫琴がこのとき、英子の体調の変化を知らずにいたとは考えられぬだろう。そのことが後の悲劇を増幅する。

### 日本男子の品行を論ず

この時期の紫琴の旺盛な活動は、文筆においてもおこなわれている。次の三篇がそれを代表するが、すべて全集未収録である。

I 「日本男子の品行を論ず」(西京 清水とよ女「東雲新聞」1889.5/8, 9, 10)

II 「一夫一婦の建議に就ての感を述べ満天下清徳の君子淑女に望む」(清水とよ女「京都日報」6/7)

III 「謹んで梅先生に質す<sup>(15)</sup>」(瀧氏 秋玉「東雲新聞」6/13, 14, 15, 16)

「日本男子の品行を論ず」は「敢えて同胞兄弟に望む」と好一対をなす、紫琴の女性解放論の重要な文章である。

学識財産ある立派な人物でありながら「男女の情慾に関する行い」において、いかに日本男子が致命的欠陥をもつか、それを正面から堂々と取りあげている。

芸娼妓になるものの事情身の上は千差万別であるが、これを「需用する人あるがために此業を営む」のであることは一致している。芸娼妓は女子のごく一部だが男子は「滔々たる二千万人中未だ曾て芸娼妓を需用したる事なきものハ蓋し幾人もなかるべし」と紫琴は迫る。

斯の如くなり来りたるハ必竟今日迄の婦女ハ概して学問なく智識なく財産なく職業なかりしを以て男子と対等の地位を保つを得ず随て情交てふ清潔の交りを結ぶを得ず。故に男女の交りと云へば単に肉体にのみ止まるものとなり其極男子ハ女子を玩弄物又ハ奴隸として輕視し女子も亦自暴自棄の余公然其不当る責めざりしを以て男子ハ憚る所なく社会に跋扈し遂に遊蕩の輩となりしなり且つ古より我国に行はれたる道德ハ至極偏頗なるものにてありし故なり其一二を挙て云ハズ貞女は両夫に見へずと婦女にハ戒めながら男子にハ妾を蓄ふに其姓を知らざれば之れを卜すなどと教へ妾を蓄ふる事をさへに公認しあり又嫉妬を七去の首位に置き而して女子にのみ七去の責を負はしめたるが如き決して其當を得たるものにてハ非ざりしなり是を以て男子ハ之れを奇貨として随意に姦淫を行ひ妾の多きは却て富の度の高さを示すものゝ如く思惟し他人亦之れを美称する程の事にてありき古来函入娘の称はありながら函入息子の唱へなきを以て見るも男女品行の検束

に寛政の差ありしを知るに足る而して其結果や今日に至りては既に習ひ性となりたるものゝ如く何人と雖も多くは習慣の奴隷となりて男子は女子の如く劣情を制し得べきものに非ず又制せざるも可なるものなりと思惟することゝなりしなり……朝に鬚を捻りて時事を論じ夕に膝を崩して柳橋の花に戯るゝが如き賤業者流を妻とし若くハ数婦に戯れて婦女を玩弄視するが如き之れを如何んぞ文明国人の所行と云ひ紳士の所作と為すを得んや今や憲法てふ未曾有の花ハ既に開け国会てふ見事なる花も遠からずして十年来の蕾を破らんとする時季なるに「実の一つだになきぞかなしき」と嘆ぜらるる可き山吹と同一般なる身を以て文明園裡の春を占め百花の主人と為らんとするハ実に笑止の極と云ふべきなり男子諸子よ翼くハ深く自ら猛省し幸ひに大に改むる所あれ

今日の日本男子の「真正の文明国」「真正の紳士」にはあるまじき蛮行、不徳義が激しく追及されるとともに、その原因がたどられている。男子は女子とちがって「情慾」を制しえぬもの、とするような固定観念が牢固として大勢をしめていた時代に、それを長年の男女の地位の不平等からくる「習慣の奴隷」にすぎぬものとして歴史的にとらえ、不品行の自己弁護にすぎぬ俗見として理路整然と説いているわけである。

女と男の根元的平等、一夫一婦の思想の貫徹を果そうとするなら、これは避けて通れぬ問題であった。問題の本質からみれば、むしろ参政権の要求などのほうが実現性は容易なのだともいえる。男子の品行というその容易ならぬ問題に若い紫琴は敢然として挑んだのである。あらゆる有髯男子を向うにまわし、山吹の歌にひっかけて「笑止の極<sup>きわみ</sup>」とののしった度胸のよさは、紫琴の生得のものであったろう。しかし、そればかりではない。これこそは“女”に徹することで至りえた、植木枝盛にはない紫琴の思想のラディカリズムである。「敢えて同胞兄弟に望む」における、一家内の小君主専制の告発と、「日本男子の品行を論ず」における、一家外の妾、芸娼妓公認の告発とは、紫琴の女権論を構成する両翼である。男性によって母性と娼婦、家族制度内の母妻と家族制度外の娼婦とに二分割され支配される女の性、という今日の観念に紫琴の論は早くも的がしぼられているといえよう。

### 一夫一婦建白運動の組織者

一篇の論文が、なにほどの実効をも生みえぬだろうことを紫琴もよくこころえていた。それゆえ運動としての「一夫一婦建白」に紫琴は奔走した。「京都日報」掲載の「一夫一婦の建議に就ての感を述べ満天下清徳の君子淑女に望む」には、運動家、組織者としての紫琴の鋭敏な対応能力をみてとることができる。

当時一夫一婦建白運動は全国規模でおきていたが、ここで、中央の情勢を少しみておこう。

すでに1885年（明18）11月、「廃娼論」（「土陽新聞」）を発表し、高知県会において廃娼建議（1886 1/29）を提出して以来、東京婦人矯風会とつながりをもっていた植木枝盛は、その要請によって89年5月23日数寄屋会堂で「倫理の大本」という一夫一婦論を演説した。東京矯風会を中心に中央の

一夫一婦建白運動が急速に盛りあがっていた。この運動の中心人物、徳富蘇峰の姉、湯浅初子に招かれ植木は建白書の起草の相談にあずかった模様である。(『植木枝盛日記』5/26) 今日、この建白書本文は発見されていないが、これより前「女学雑誌」(1889.5/11)に、湯浅はつ「倫理の基の要旨<sup>(16)</sup>」が掲げられ、これに賛同する政府請願の署名がよびかけられた。

「東京朝日新聞」(5/22)は、この「倫理の基の要旨」全文を報道し、以後社説を掲げてこの運動の意義を宣揚するとともに、一夫一婦の実現という「人生最緊最要の問題」のために、基督教に固執し、儒仏を排除する湯浅らの運動方針にたいし疑問を提した。「要旨」には次のような項があったからである。

一夫数婦の弊を救ふの第一法は基督教によるにあり、儒教は道德の活気なく且つその教へ妾を卑めず、仏教は女人を以て悪人となし、仏の熱心なる信者の中若くは高僧の中には数婦を蓄ふるもの多ければ以て頼みとするに足らず、只基督教は一夫一婦を主張するものなれば必ず之によらざる可らず。

この社説は「社会の一大勢力を造り此の一大勢力を以て此問題を遂ぐべし」といういわば「統一戦線運動の勧告<sup>(17)</sup>」(外崎光広)であったといわれる。おそらく植木が湯浅はつから持ちかけられた相談はこのことに関わるだろう。植木の『日記』によれば「建白書草稿を渡す」(5/31)とあって、基督教関係者でない植木に草稿が依頼されたと見られる。

結局、この年の6月27日、基督教に論及した条項が含まれない一夫一婦建白書<sup>(18)</sup>が元老院に提出された模様である。第一筆に加入したのは加藤弘之夫人、中島信行夫人(岸田俊子)植木枝盛、巖本善治であり、その他「八百余名、著名の士女頗ぶる多」かったと伝えられる、広範な動きであった。この建白運動が地方にも波及し、神戸、大阪、西京、札幌、函館、高知、千葉、横浜、岡山などから建白書に合同する動き、またあらたに起草するものなどが続出した、と『女学雑誌』170号は伝えている。

「京都の清水豊子は一夫一婦の建白書を元老院に呈出せんとて彼れ是れ奔走計画中なりしが此程同意を表せし女子百三十余名に達せしを以て不日洛東有楽館に於て京都女子大懇親会を開き協議の上総代二名を選出して東上せしむる都合なりと云ふ」(『女学雑誌』170号)とあって、先の「京都日報」に報じられた京都府出願のみでなく、総代上京という情勢になったらしい。景山英子もまた京都同志会の建白を掲げて上京した(『女学雑誌』175号 8/17)と記されている。

「東京朝日新聞」社説が、建白運動の統一戦線の勧告だったとすれば、紫琴もまたその必要を感じていた一人であった。「京都日報」(6/6)掲載の「一夫一婦の建議に就ての感を述べ満天下清徳の君子淑女に望む」は、小異を捨てて大同を採る、共同行動の必要をつよく各地に呼びかけた紫琴の論である。後半の一節は次のようである。

一拳の石山を成し一勺の水海を成すと雖ども堆積結合するに非んば何ぞ山たり海たるの大観を

成すを得んや東京婦人矯風会の如きは既に確固たる一団体を成し居るものなれば素より一拳の石一勺の水の比には非ざれども今若し彼一団体にのみ放任して単独の運動を為さしむるに於ては其成功は決して予期す可らず必衆多の兄弟姉妹の一致結合を須ち而して後其目的を達するを得べきなり 矯風会諸姉と雖も亦隗より始めよとの意を以て率先嚮導せらるゝに外ならざるべし之れを換言すれば天下を動かさんが為め先づ自から動かれたるものなり果して然らば矯風会の諸姉は基督教信者の資格を以て元老院へ建白せらるゝには非るべし其身婦女なるが為めに建白せらるゝにも非るべし蓋し日本国民といふ單純の資格を以て建白せらるゝものと信ず故に苟しくも一夫一婦を是認する者ハ儒仏何れに帰依するを問はず男たり女たるに拘はず勉めて無形の結合を謀り共同の運動を為し大に輿論を喚起し機会を成熟せしめざる可らざるなり其建白の趣旨細目等は強ちに矯風会と同一なるを要せざるなり小異を捨てゝ大同を採るの要ハ豈に啻に政論のみならんや 聞く大阪婦人は既に此挙に倣へりと 敢て乞ふ満天下清徳の士君子淑女達よ各自便宜の地に於て速に共同の運動を試みられん事を時方に梅雨の候なり漸く清朗ならんとするの月をして再び浮雲に覆はれしめざらん事を至嘱々々

堂々たる呼びかけである。矯風会の運動を上まわる「機会の成熟」を目論んだ、冷静な組織者の面目充分である。植木が執筆し元老院に提出されたと思われる建白書の内容について、この短時日のうちにも紫琴が植木から知らされていた可能性はあるだろう。それにしても「建白の趣旨細目は強ちに矯風会と同一なるを要せざるなり」として、あらためて全国規模の男女に自発的共同行動への結集を呼びかけた、紫琴のたくましい行動性をみることができる。

### “暴力”と“情慾”の同等

矯風会の建白内容にこだわる必要はないのだ、と主張した紫琴は、自身進んで独自の内容の京都建白書を提出したのである。湯浅はつの「倫理の基の要旨」第六には姦淫の悪習を断つための方策が掲げられ、その一つに法律上の制裁があった。「刑法第二百五十二条は左の如く改正せられんことを望む」として以下の条文が示されてある。

現行法 有夫ノ女姦通シタルモノハ五ヶ月以上二年以下ノ重禁錮に処ス其ノ相ヒ姦スル者又タ相同シ

改正案 有妻ノ男子若クハ有夫ノ女他ノ男女ニ姦通シタル者ハ六ヶ月以上二年以下ノ重禁錮ニ処ス其相姦スル者亦相同シ

これは姦通罪が女子にのみに適用されるという男女不平等を是正した、画期的な改正案であったが、紫琴はさらにこれに刑法三百十一条を加えて徹底した改正を要求したのである。

現行法 本夫其妻ノ姦通ヲ覚知シ、姦処ニ於テ直チニ姦夫若クハ姦婦ヲ殺傷シタルモノハ、其罪ヲ宥恕ス……

改正案 本夫若クハ本妻一方ノ姦通ヲ覚知シ、姦処ニ於テ直チニ姦夫又ハ姦婦ヲ殺傷シタルモノハ、其罪ヲ宥恕ス……

外崎論文によれば、この刑法条文改正の要求は、植木枝盛の演説筆記にも含まれていない紫琴独自のものである。夫婦、男女の平等の理論を貫徹させるという点において、紫琴の有した論理的特質をよく発揮したものとといえるであろう。しかし、たんに法的整合が要求されたものとみるべきではあるまい。妻の側の殺傷可能性を現実に想定し、その権利を夫と同等に要求する、男女平等観念のラディカリズムがここにある。紫琴は男女に「情慾」の差を認めなかったと同時に「暴力」の差を認めない考えかたに立っていると思われる。女権思想家として自己確立した紫琴の新しさをここにみることができる。

論争文である「謹んで梅先生に質す」(1889.6/13, 14, 15, 16)についてふれておこう。これは、「東雲新聞」の寄書(投書)、梅生「一夫一婦の制限の非を論ず」(6/6, 7, 8)に反論したものである。梅生の論は当時の一般男性の常識的平均的な思考と思われるもので、優勝劣敗論をふまえた意識無意識の男性中心主義であり、一夫一婦の弊害を未然に防ごうとしているものである。紫琴はこれに辛抱づよくつきあい、忍耐し、しかも痛烈に反論する。

たとえば梅生は「男女同権なるものは生理上より之を論ずれば到底行へれ難き者にして又経済上より之を論ずれば甚だ弊害ある者なり何となれば優勝劣敗の理ハ宇内万物の決して免る可からざる者にして男女其権を同じくせざるは優勝劣敗の理に出でたればなり」というに始まり、男子は外、女子は内助、一夫にして数婦を許せば女子の数が足らなくなって配当不平均をきたすが、それを救うのが娼妓。これを廃せば人の妻を盗むなど風俗紊乱は必定。有妻姦を罰するとすれば訴訟煩瑣となり裁判官が迷惑する、男は告訴をおそれ法律上の婚姻をさけるから出生児はすべて私生児となる。夫婦関係に権力介入はよろしくない、といったふうの「奇説」に紫琴は熱烈にまた理路整然とこたえている。梅生が民権男性である以上紫琴ははっておけなかった。

儂ハ一夫数婦ハ道理に背反するものなりと信ず一夫数婦ハ人情に悖るものなりと信ず一夫数婦ハ野蛮の遺習なるを知る一夫数婦ハ一家を擾乱するの原因なるを認む一夫数婦ハ女子を無気力のものたらしめ玩弄物たらしめ器具機械たらしめ賤業汚行者たらしむるの媒介なるを知る而して又一夫一婦の制限ハ道理より推すも実際に徴するも是非とも設けざる可らざるものなりと思ふ

(中略)

先生が謂ふ如く優勝劣敗を常数なりとして自然の成行きに放任すべきものならば中央集権の弊も矯むるに及ばざるなり民権と云ひ自由と唱へ慷慨悲憤する事も亦無益なるべし……所謂優勝劣敗なるものは是れ競争の結果たるに過ぎざるに其結果を予期し劣者たるべしと思惟する者の権利を最初より制限するが如きハ豈道理に合ふものならんや

(中略)

若し男女とも同一の身体にして同一の業務に服すべきものならば何ぞ必ずしも男女両性を要することもあらんや男と女が相須て始めて完全の働きを為し得るハ恰も電気の陰陽両性あり其相交通するに因って化学的作用を起すが如し然るに女子ハ兵役に服する能はざればとて男子に劣れりと云はば恰かも是れ男子ハ子を産まざるを以て女子に劣れりといふが如し

というような具合に根本の議論をたてながら遂一論破してゆくのである。引用は長くなるから止めるけれどもその論理の明晰において、到底梅生は紫琴の敵ではない。論争家としてのテクニックにおいても紫琴は抜群といえるだろう。最後に引用しておきたい一節がある。

先生ハ男子の性は活発なるを以て婦女の如く慎み得べきものに非ずとせらるれと婦女なればとて生理上男子と情慾の度に高低あるべき筈はなし之れを慎むと否との差あるのみ

先に紫琴の男女平等観念には“暴力”と“情慾”の同等が含まれていることを述べた。これが「情慾」に男女差のないことを明瞭に表現した一節である。「日本男子の品行を論ず」において、男子の「情慾」をおくせず問題視した紫琴であれば当然の帰結でもある。嫉妬が女の専売のように思われた既成観念も当然破られている。存在としての男女が知性においても情念においても同等である、と紫琴は確信している。家父長的家族制度は、母妻として女子を家庭内に閉じこめ家庭内存在とすることで、女の情慾を認めないか、あるいは家族制度、家庭外の妾、娼婦を公認することで女を情慾のみの存在とみなすか、どちらかである。紫琴はその二分割を認めない全円的な人としての女性主体を認めることを要求したのである。

ただ、紫琴は「情慾」を「劣情」としてとらえている。これは透谷もまた超えられなかった、明治二十年代の思想の限界であろう。情慾官能が次第にそしてあらわに肯定されるのには、明治三十年代の藤村と与謝野晶子とをまたなければならない。

### 『女学雑誌』編集長まで

景山英子ら数人の「ますら婦」が、女権拡張・女子風俗改良を目的に組織したという「関西婦人大同会」(『女学雑誌』1889, 7/13)には、おそらく紫琴も加わっていたであろう。しかしこれは景山の上京のため発展せずに終わった。東京矯風会書記の佐々木豊寿が設立(1889.9)した「婦人白標倶楽部」にも紫琴は参加していたようである。

「西京にて女丈夫の名を得し清水豊子は、今回一の雑誌を発兌し、女権拡張及政治上の事を論議するなりと」(『扶桑新聞』1889, 11/12)とあるから、雑誌発行の念願も依然継続していたようだ。

「目下、京都に住む女権拡張論に熱心なる清水豊子は、京都に於て婦人団体を組織し、自由主義の一団体を造んとて、目下奔走中」(『女学雑誌』1890, 2/1)ともある。植木枝盛の日記によれば、



この1890年の1月9日、10日、12日と連日、紫琴が京都の植木の止宿先を訪れている。「自由主義の団体」を婦人で組織するという、その相談役が植木だったかも知れない。組織活動においても言論活動においても、紫琴はこの頃もっとも充実した時期を迎えていた。現状変革の使命感にもえて精力的に活動していたのである。

しかし、あの「梅生」が民権家男性のひとりであったことを思うだけで、紫琴の負わねばならなかった状況の困難は察しられる。話題をまいてよさそうな力作論文「日本男子の品行を論ず」さえ、じつは何の反響もなかったのである。

やがて紫琴は上京した。1890年5月のことである。

しばらく同居した佐々木豊寿宅では紫琴到着の一ヶ月前から「矯風同盟打合せ」会が開かれ、5月24日から4日間にわたる「全国廃娼同盟会」の準備が進んでいた。日本ではじめての廃娼運動全17団体の大同団結である。高知県の公娼廃止決議につづく、群馬県廃娼会をめぐる県会の衝突が導火線となり、当時、公娼存廃論は世論の関心をあつめていた。廃娼論者としてもっとも活躍したのは巖本善治、島田三郎、植木枝盛であったが、なかでも枝盛は佐々木宅の準備会の段階から重要な役割を果し、廃娼論と廃娼運動の先頭に立っていたと考えられる。

紫琴がこの運動にどう関わったか明らかでないが、巖本善治とつながりの生じたことが重要である。巖本の主宰する『女学雑誌』に記者として入ることが決ったからである。もっとも「去年の今日は多くの希望と奮発心を齎して勇心勃々出京致し」(91・5/1書簡)という回顧があるから、廃娼運動を通じて親しかった佐々木か植木が、あらかじめ入社の手配をしたのかもしれない。動きのとれぬ古都京都に、ひそかに落胆し、そこでの雑誌発行の夢を東都に持ちこすこととなって、「勇心勃々」上京したのであろうか。ともかく編集者記者としての紫琴の才能がここに十分に振るわれることになった。

1884年に「絵入自由燈新聞」に校正記者として入った富井於菟<sup>おと</sup>がいて、紫琴は女性記者第1号ということにはならないが、その働きにおいては断然第1号に価するであろう。紫琴入社当時の『女学雑誌』は『国民之友』と並んで青年知識人の人気をえていた。

「婦人雑誌のやうに聞へますが、読者は男子が多く、従って政治も論ぜられれば経済も語られ、文学も談ずるという風で、知識階級<sup>じゆうのとしび</sup>の家庭に備へて一家一冊の観」があった、とは相馬黒光の語るところである。しかし、『女学雑誌』にも変遷とゆれがあって、とくに紫琴入社以降の160号('89・5/4)からが、読者上層である男性層をめがけて内容の高度化をはかっている。

巖本善治「女学の解」('88・5/26)によれば、「女学」とは女子の地位を向上させ、その権利を伸張し、女子を幸福にするためのあらゆる学問を意味していた。85年(明18)の発刊以来、旧来の封建的モラル、女性観に抗し、キリスト教を背景とする自由主義的、個人主義的な「前期良妻賢母<sup>(20)</sup>」思想をその女学の中核としていたが、そのかぎりでもっとも早い女性解放の「機関誌」的性格を担っていた。この雑誌と明治女学校の経営とが巖本の活動の両輪であり、雑誌のスタッフは学校教師を兼ねる場合が多かった。紫琴もまた明治女学校独身寮に住み込み、本科1年の作文指導をしながら、『女学雑誌』記者として活躍をはじめたのである。

そしてこの年の11月、編集方針の大幅変更とともに、八名の有名女性がスタッフとして名を連らね、紫琴が編集責任の位置についた模様である。これまで、紫琴の「女学雑誌」時代を、“若き女性編集長主筆”というふうに、はなやいだ取りあげかたをする向きが多いが、じつは紫琴のすぐれた本領は、この編集長就任までに発揮されるのであり、紫琴の女性記者としてのめざましい働きは、この短期間で終るといってよい。

### 当今女学生の覚悟如何

この時期の注目すべき評論は次の四篇である。

- I 「何故に女子は、政談集会に参聴することを許されざるか」(’90・8/30)
- II 「泣いて愛する姉妹に告ぐ」(同・10/11)
- III 「当今女学生の覚悟如何」(同・11/15)
- IV 「女文学者何ぞ出ることの遅きや」(同・11/29)

第一の評論は「集会および政社法の改正は吾等女性に一大驚愕を与へたり」という一節にはじまる。この年、1890年(明23)すでに成立した帝国憲法体制は婦人参政権を廃除していたけれども、さらに7月25日に公布された集会及政社法は、女子が政党に加盟すること、政談演説会の発起人になること、政治集会に合同することを禁止した。紫琴の論はその「正当の理由なき」こと「国家大不利」たるゆえんを熱烈に説いている。

女子の二字あるが為に、吾等二千万の女子は皆ことごとく廃人となれり。予は政府が何故に一般女子を駆りて、かく政界より拒絶放逐するの必要を認めたるかを疑ふものなり。また吾等女性はこの世上に生存し、人間としては、各自一個の靈魂と総ての官能とを、具備しをるものなるに、独り女子てふ名称の下に在ればとて、その靈魂官能の自由をば、かくの如く男子よりも幾層酷に剝奪せらるゝは、果たして何等の理由に基づくものなのか、予輩はこれを了解するに苦しむなり。

近代の人権意識にめざめた女性にとって、参政権はおろか、政治集会の自由もないという明治近代の体制の女性差別は、不可解という以外の何ものでもない、その憤懣が吹き出ている。「人間が人間の上にかくの如き法律を施行し得るの権力あるや否や」という、根本的疑問に達着せざるをえない。禁止の理由である、女子は男子より知識能力に劣り、その本分たる育児家政を怠る、という理屈にたいし紫琴は述べている。知識能力に差ありとすれば一般男子中にも差はあり、いちいち検定の必要がある。女子はいかに秀才英傑も男子の無知無能に劣るか。男子は一般に農工商の職にあるが、政談に参加すればこれも本分に怠りありとしなくてはならぬ。男と女の完全平等の観点からする当然な反論である。有為の国民養育者たるため女子の政談参与はむしろ不可欠、国家の利益だとされる。これはことあたらしい論理ではない。今日から見れば、むしろ男女の性役割の固定化という重大な危険をふくんでいるだろう。しかし、この点は当時まだ誰も超ええなかった理論的境界

であった。ひとり紫琴のみ責めを負うべきものではないだろう。育児、母妻の論理に従いながら、それを逆手にとった、公権の要求とみることができる。

「泣いて愛する姉妹に告ぐ」は衆議院規則案第11章、傍聴人規則中「婦人は傍聴を許さず」とあるに対しての抗議であるから、論としては同一線上のもの。しかし先の論のような格調の高さはない。憲法にいわゆる「日本帝国の臣民」に相違なき者の「一半」が、婦女なる故に国会を傍聴できぬとは不可解。愛する姉妹らよ「何ぞ忍んで沈々黙々たる事やある」という呼びかけである。

紫琴の面目をもっともよく表わし、この期の評論中の白眉ともいうべきは「当今女学生の覚悟如何」であろう。

これは当時としてもっとも冷徹な結婚論であり、今日のように「非婚」ということが、自立した女の生活スタイルとして受容され始めた時代と異なり、長じて嫁がぬ女など考えられぬという時代の、結婚制度批判である。

学生としてまだ充分の業を卒えぬうち婚儀を急ぐ友人にたいし、早過ぎるのではないかという友が答えているには、自分は病身である。この上螢雪の労には堪えないから、速やかに身の納まり方を計るのである。「予はこれを聞きて大に驚きぬ。学びの庭に遊び得ざる程のもの、いかでか結婚後の苦艱に堪え得らるべき」と紫琴は述べている。結婚生活が「苦艱」そのもの、「失樂園」であって決して樂園でも安息室でもないことを明瞭に説き、女学生の甘い結婚幻想を徹底的に打ち壊そうと意図している。

一朝校舎を辞して、他家に嫁ぐと同時に、慣習感情全く異なれる人々と雑居同住し、一挙手一投足、ことごとく彼等の為<sup>へいげい</sup>に睥睨せられ、いちいち試みに遇ふが如き心地す。わづかによってもって立たんとするところの良人は、絶えて同情同感の念を有してくれず、かへってままその愁へを重ねしむる事あり。かくて時日を経るに随ひ、始めは姑息の愛にもせよ、とにかく自己を慰めくれたることもある良人は、漸次に花に、月に浮かれ歩行きて、家事はいっさい顧みず、舅姑はこれをもて、嫁の取扱ひ方悪しき故として、我が子を戒めず、かへって嫁を罵る。堪へかねて一言もて諫むることあれば、ダカラ女学生の妻は嫌ひダといふ。何故かと問へば理屈をいふからといふ。いやとよ理屈にあらずといひかくれば、それがすなはち理屈なりといふ。口惜しと、思ふとも、とても威の行はるところに、真理は容れられまじと口を鍼<sup>しん</sup>してあきらむれば、罪を謝せよといふ。何の罪いづれかにかあるとは思ふも、しばらく円滑に治めんとて、心にもなき謝辞を呈し、潜かに心脾に涙を滴らすこともあらむ。しかしてせめてもの思ひ晴らしにとて、これを実家に訴ふればいかに。実家の母と姉とは、自己の境遇と祖母の経歴とを挙げて、汝の如きは、まだしも幸福<sup>さいはひ</sup>なりといふならむ。ああ何の幸福何の勝運ならむ、不幸悲惨果たして婦人の天命かとは、思ふも甲斐なし。

他家に嫁ぐという結婚制度が、若い女にとって何を意味するか、その四面楚歌の孤立状態がきわめて具体的に説得的に述べられている。

学窓にいただいた希望、高尚なる理想はあとかたもなく、ただ「習慣の奴隷となり、一個の器械としてその身を終らんのみ」という状態であるなら、結婚を一生の身の落着き方と心得、無職の青年が職にありつuitたかのように、ヤレヤレなどと思うべきものでは決してない。

紫琴は女学生の漠然たる結婚願望に容赦なく冷水をあびせる。真に情愛深い夫とか、改進黨の舅姑とかいうものが見当らぬ以上、「改革者たるの覚悟」をもって結婚にのぞまなければならない。また「自分の意志に適したる良人、改良の望みある家族」と信じられぬなら、「決して婦がじとの決心なかるべからず」と述べている。はっきりとした結婚拒否のすすめである。家父長的家族制と一体の結婚制度によって、一人の女性が支配被支配関係に組み入れられること、結婚の場が「家長権、親権、夫権といった権力構造をもつ場<sup>(21)</sup>」であることを紫琴は見定めている。そして女学校教育を受けた女性は、こうした状態を変革するべきではないかと呼びかける。

諸嬢の前途や実に遼遠、しかして日本今日の状態たる実に困難、家裡に於ても、夫婦間においても、改むべきもの、変ふべきもの一二にして止まらず。いはんや二千万姉妹と二千万兄弟との間に於ける関係をや。しかしてこれを改めこれを実行するの責に当るべきもの、女学生諸嬢を措きてそれ誰ぞや。

男女の関係の変革は女によってしか行われえないし、それを自覚できるのは女子教育を受けた女学生でなければならぬ、と紫琴は考えている。サルトルは女にとっての主要な矛盾は、男と女の関係であるとし、「女の闘争は従来いわれてきたのとは反対に、階級闘争に優先する」といった。その意味は、「性別を利用してなされている、もっとも大きな搾取状態は、女に家事、育児の無料労働を背負わせる、男女カップルの制度である。女にとってはこれが第一義的矛盾であり、資本主義はその次の矛盾<sup>(22)</sup>」というふうに考えられている。紫琴が今日のフェミニストのようなこうした観点をもつことは当然なかったけれども、彼女が、二千万姉妹と二千万兄弟との関係、女と男の關係に集中する権力構造をもっとも主要な変革目標においたことに、明治の女権思想としてのもっともラディカルな先進性をみることができるであろう。

「一国の政事に参するよりも前に一家の主権に<sup>あづから</sup>与ん」がやはり紫琴の変らぬ覚悟なのである。ところで、女が女として自己主体に固執するとき、結婚による「改姓」は、自己同一性の喪失として意識される。しかし夫婦別姓は今日もまだ解決をみていない問題である。ところが紫琴は当時すでにこのことを考えている。「問答（細君たるものの姓氏の事）」（「女学雑誌」'90・12/13）に次のような一節がある。

全軀夫婦とは、婦人が男子に歸したるの謂ひにはあらず、一人前の男と女が、互ひに相扶け、相<sup>あ</sup>述<sup>は</sup>ふの目的をもて、一つの会社を造りたる訳のものなれば、いづれが主、何れが客といふ筈のものには候はず、故にしたがって、夫には夫の姓氏あり、婦には婦の姓氏あるは、もとより当然<sup>あたりまへ</sup>

の事に候。

同じ『女学雑誌』に「厭世詩家と女性」を書いて北村透谷が登場したのは1892年5月、1年半ほどのことである。(この時紫琴は編集をはなれている)

「恋愛は人生の秘<sup>ひみつ</sup>鍵なり」という著名な近代恋愛宣言が、当時多くの知識青年に衝撃をあたえたことは周知であるが、この評論は同時に結婚幻滅論であって、島崎藤村などはその恋愛と結婚との明暗対照にむしろ感銘したようである。

嗚呼不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通弁となりて其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで、寝ての夢、覚めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところとなるぞうたてけれ、うたてけれ。

結婚生活の悲惨、とくに相手が世俗にうとい厭世詩人である場合の女性の不幸を傷む、結末の一節である。

紫琴の場合、女性の不幸の原因は結婚制度にあったといっていよい。結婚にたいし甘い幻想をいだく女の無自覚が、きびしく戒められていた。透谷の場合、結婚のもたらす幻想の崩壊を、詩人(男)の不幸においてでなく、女の不幸において語ることで、詩人(男)の幻想の相対化がはかられる。そのかぎり女性に同情的な在りかただが、結婚制度というものによる女の不幸が感受されているわけではない。結婚という実生活を嫌厭する、厭世詩家論、詩人論であって、女性主体の側から発言している紫琴とはおのずから異なる。

「女性は感情の動物なれば、愛するよりも、愛せらるゝが故に愛すること多きなり」とは、透谷にして超ええなかった女性観の限界を物語る言葉である。「人は魚のごとし……」というあの文章が果しえた明治近代の擬制批判も、ここまでくれば、「女」であることを思惟の核心に据えた、紫琴の思想的強靱を抜くことはできないというべきであろう。

### 日本に要する文学

「当今女学生の覚悟如何」の発表された『女学雑誌』('90・11/15)には「女学雑誌改進の広告」および「女学雑誌改進大略」が掲載され、第241号('90・11/29)を期して編集方針の大転換が行われることが広告された。それによれば、近年の時勢変化によりこれまで多数発行された婦人雑誌が姿を消し、女学生は途中で学業を廃する者さえあって「新たに女学の必要」がある。『女学雑誌』は其一半を割いて、二、三年前のような広範な教育啓蒙活動をすることとなり、ここに大改進を行う。文字を平易に、事柄を実際的にし、一般婦人読者のためをはかる。上層読者にたいしては毎月一回「本誌半分の大附録を添へて大問題に対して大議論」を展開するものとし、160号('89・5/4)つまり紫琴入社時以降、上層男子読者にむけて高度化した編集内容をあらためることになった。上下両層の読者に対応する『女学雑誌』本来の姿をとりもどそうとし、同時に従来の社員のほか、中

島俊子（評論）若松しづ（文芸）田辺花圃（文芸）荻野吟子（医学・衛生看護）吉田伸子（理学）安藤たね（訪問記事）小島きよ（家政学）らを聘し、それぞれの分野の活躍を期したのであった。当時第一級の女性を集めた豪華な顔ぶれである。紫琴はその編集責任者として位置したことになる。

この『女学雑誌』の大改進の背後には、90年（明23）10月30日の教育勅語の下賜があったことは注意してよいだろう。帝国憲法の発布、教育勅語下賜と着々打ち出される国家権力の体制整備の布石にたいして、この「大改進」は「女学」の側の大衆化への方向転換による、一種の陣容たて直しとも考えられるが、実際には、女論は以後次第に停滞をはじめるのである。

この女論後退、低調化の時代にたまたま巖本善治の周囲に集った星野天知、北村透谷、島崎藤村、平田禿木らによる『女学雑誌』の“文芸化”時代が重なる。90年度に入りその傾向は急速に高まるが、その第一着が先の「厭世詩家と女性」であった。

紫琴が編集方針の変更をふまえて書いたと思われるのが「女文学者何ぞ出ることの遅きや」（'90・11/29）であった。一言でいえば、文学世界に女性いでよという呼びかけである。

女子教育はじまって十余年、いまだ女文学者の現われぬは不思議である。その原因は、女性がためらうことを美德とする旧習を脱しないのと、「対世界の活物を読むの思想」をもたぬためである、と紫琴はいう。伝統古典の世界や美的世界ではなく、生きた現在の現実にかかわる精神、日常現実直接した問題をとらえて描く文学を、紫琴は熱望しているといっている。こうした文学観はおのずから「実際今日の日本に要する文学上の働きをなしたまへ」という要請になる。

「我々自身にとっての『明日』の必要を発見しなければならぬ。必要は最も確実なる理想である」（「時代閉塞の現状」1910・8）という石川啄木の呼びかけは、さらに二十年後のことである。紫琴には“国家強権”の観念も社会主義思想の知識もむろん無いが、抑圧された二千万同胞としての“女”の思想の根拠に、“日本に要する”文学を求めた姿勢は啄木と同じであろう。

紫琴の小説第一作「こわれ指輪」（1891.1.1『女学雑誌』新年付録）は、この評論の主旨の実践として書かれたものと考えられる。「こわれ指輪」については、近頃の再評価のなかで対立的な意見も出されており、一葉その他同時代の表現のなかで、のちに詳細に論ずる予定である。ここでは評論「女文学者何ぞ出ることの遅きや」の意義とともに、「今代の紫いづこに潜める、明治の納言いづこにある、妾は切に君を待つ、妾は切に君を待つ」という紫琴の焦燥と待望の烈しさが、「こわれ指輪」一篇の背後にあったことを確認しておきたい。そして、紫琴の『女学雑誌』時代のピークはここで終りをつけるのである。

### 有能なジャーナリスト

編集方針転換以前、紫琴が『女学雑誌』訪問記者として活躍した、インタビューアーとしての有能ぶりについて記しておくことにしよう。

「女子演説家と評判する青井栄嬢を訪ふ」上、下 '90・6/14, 21「跡見花隠女史を訪ふ」（上、下、同・6/21, 28）「静女塾主、平尾みつ子女史を訪ふ」（1, 2, 3, 4, 同・7/12, 26, 8/30,

9/13)「小松崎古登女を訪ふ」(1, 2, 3, 4, 同・8/2, 9, 16, 23)「女医荻野ぎん子女史を訪ふ」(同9/20)「敬宇中村先生を訪ふ」(同・9/27)「同伴に付き板垣伯を訪ふの記」(同・10/11)などがある。

当時、世間に評判の高かった女性たちの事業内容、活動の実際など、聞きとりのカンどころをおさえたい確な問いが発せられ、自在に談話を引き出して、相手に語らせ真相を伝える。同時に相手の人物、その挙指動作にたいする注意、また訪問時の周囲の状態・客間の敷物にいたるまで、鋭くすばやい観察がゆきとどいていて、それが生き生きと旺盛な筆力によって語られる。紫琴の有能なジャーナリストとしての才腕がうかがわれる。元毎日新聞記者(小林登美枝)に「インタビューとしても絶品<sup>(23)</sup>」という賞讃がある。

紫琴らしさは、たとえば女弁士として世間に評判の青井栄嬢が「女権といふ事については何等の感じもなき」ものの如く、至って覚束なき実像が容赦なくさらけだされる、というところにある。また、跡見花隠の女子教育論が「女子は、どこまでも温順にて学問諸業とも一通りを心得どこへ出しても恥づかしからぬ奥様となり得ればそれで充分」というのにたいし、今後の女子は「各自一個の職業を修めなるべく男子の厄介にならぬ様致したくと存ずるが女史はいかが」などと一押しするのが紫琴の面目である。しかし、「実に女らしきとはかかる事をやいふならむか」と顧みられて気恥づかしく、などと皮肉か韜晦か、最後の止めは緩急自在である。しかし、薙刀術の小松崎女史から「躰育の一法」としての薙刀を引き出したり、女医荻野ぎん子から男子による診察をはばかり、また夫の意思いかんをはばかって不治の病に陥る女子のため、婦人科女医がいかに必要かを引き出すなど、紫琴の面目は失われていない。

さらに注目されるのは板垣退助訪問記である。先に「婦人は傍聴を許さず」という衆議院規則案に抗議し、紫琴は直ちに「泣いて愛する姉妹に告ぐ」を書いたのであるが、一篇の評論の力弱さを思い、同伴について板垣伯の意見を叩き、当局と世論の注意を促そうという、雑誌記者の立場をフルに利用した政治的意図をもつ会見記である。それにしても唯一人で、「来往者さながらに織るが如き伯爵邸を訪問し面談に及ぶことは、並の若い女性にできることではないだろう。生来の気性の剛毅さと衆議院傍聴禁止案反対の情熱の賜だろう。」

「それはいっこう、訳のわからぬ事なり、果たしてさる事あらむには、予の意見を問ふまでもなく、むろんその筋へ上書するも、宜しからむ、議員に意見書を送るも宜し」

「全体この規則案を政府にて拵へるといふ事からして既に間違った話なり、衆議院は役所にあらず、人民の相談所なり、故に申さばこれを路傍で開くもまた物を喰ひ喰ひ聞きても差し支へなき筈なり」というような板垣のいきのよい談話を引き出し、女が政治に冷淡であれば国のためにも不利益、という見解を確認し、近く発刊予定の「自由新聞」紙上に、その論を発表することを約束させたのである。充分なお手並というべきであろう。

紫琴の記者の仕事として、さらにひとつ面白いものにルポルタージュがある。「東京電話交換所女工」(90・12/20)が「我が女職界にいかなる影響を及ぼすべきや」という動機のもとに、当時噂に高い女性電話交換手の職場をルポしたものである。

男子の職場へ「純正職業婦人の侵入」といった大見出しで新聞に報じられ、電話交換手はその後看護婦と並ぶ主な女子の職業となる。このルポはたいへん詳細に作業内容、労働条件、給料その他が調査されてあるが、紫琴は「要するに、この仕事は、大人の婦人よりも、むしろ十五、六歳の少女に適するが如く思はる」と結論を出している。男の厄介にならなくてすむ、女の職業的自立を考えていた紫琴にとっては、女一人前の職業とは認められなかったようである。紫琴にはまだ労働問題という視角は生じていない。

ただ、さらに「電話交換所」(’91・2/21) という図解入りのもっと詳しい記事を紫琴は再び書いているのであって、新しい社会現象として興味をもっていたらしいことが察せられる。

### 諷刺の才

『女学雑誌』の編集方針転換が、文字を平易に、事柄を実際的に説明するという、大衆化の方向であったことは先にのべたが、90年(明23)11月29日以降、紫琴の文章はこれまでのほげよい漢文調から、一転して和文調ないし口語体となる。切々として訴えた漢文調は「女文学者何ぞ出ることの遅きや」までである。

紫琴にとっては、上京前、関西における女性の組織化と雑誌の発行とを思いあきらめた時が、ひとつの挫折を意味したであろう。ただ、「時到来ず」の思いを深めて上京し、たまたま『女学雑誌』に入社したというより、失意の紫琴のために植木などから『女学雑誌』へ橋渡しがあって、上京を決めた可能性が大きい。関西の障壁を関東から打ち破ろうという気持を抱かせるものがあったようだ。入社以後の八面六臂の活躍がそう思わせる。

しかし、帝国憲法下に着々と整備される、明治近代の体制に全力的にあらがいながらも、それがまさに紙つづてでしかない実感を、紫琴はひそかにかみしめていたように思う。「妾は切に君を待つ」という「当今女学生の覚悟如何」の呼びかけが切々と激しいだけに、女学生の現状の停滞はかえって明らかなのである。女権の理想は決定的に排除される一方で、女権を担うべき女性主体もまた絶望的に未熟であるという情況認識が、『女学雑誌』編集方針の転換、後退を紫琴に承認させたものであったろう。おそらく、この時の編集長就任は、紫琴が二度目の挫折感におそわれた時だったはずである。「革新的な主張と同時に、それが広く世に受け入れられていくよう常に気をつかって、そのことが紫琴の念頭を離れなかった」(山口玲子) というように、楽観的な向日性をみる意見には同意しがたい。

方向転換後の紫琴の文章のなかに、シニカルな味わいが目だつのをみてもそのことは実証される。次の文章は「口と心——子供正直」(’91・1/10)の一部である。

いづれの国の事にや、近頃予算委員とかいへるものありて、それが中には、つねづね潔き言のみ口にしつ、幾年か自由、民権などと唱へて、政治の改良を計りたるほどの人も、をさをさありと聞こへつるに、いかなる風の吹き廻しにや、その殿達は、ある辺りより、鼻薬とか、黄金



水とかいへるものを貰ひ受けて、<sup>よろず</sup>万その頼み人の意をのみ嚮<sup>むか</sup>へて、そが勝手よきやうに、編みなしつ、立派なる詞の裏に穢き心ををしかくし、何喰はぬ顔にて、その予算表とかいへるものを差し出でしたりとぞ、専らに噂する。……己が身は常々、都の内に、住みゐしにもかかはらず、心つくしの果てより、辛ふじて推挙されたればとて、そこよりはるばる都へ登るほどの路<sup>ついで</sup>の費を官府より請ひ受けしとかいふなる、思ふにこもまた、<sup>つね</sup>平素はさこそ政費節減をも唱へ民力休養をも説きいでつる、あわれ一かどの大将株にてありしならむに、折にふれてかく心の底の、詞には似もやらぬふし見出ださるぞ、かへすがへすも口惜しき事になむ。さればお客に向かつてお世辞を述べながら、<sup>ママ</sup>蔭に箒を建てさする奥様、<sup>うはべ</sup>表面には念仏三昧に日を暮らすと見せて、心は始終台所の隅にさまよひ、嫁の落度を見出だす姑なんどの多きは、もとより、怪しうはあらねど、かかる類のみ殖えもてゆかば果てはいかがの世となるやらむ、思ひやるだに心苦し。

これをみれば、90年（明23）11月に開催された第一回帝国議会における、民権派議員の動向に、紫琴が鋭い注視をおこたらなかったことがわかるだろう。その当時の衆議院は議席 300 の内、民党の立場にたつ自由、改進黨合せて 171 議席をしめ、政府支持のいわゆる吏党は少数派であった。民党の多数を背景に、予算委員会は「民力休養」「政費節減」の立場から、予算案に大幅削減を要求した。政府は解散をにおわせてこれに応じないかまえをみせ、自由党員とつながりの深い通信大臣・後藤象二郎、農商務大臣・陸奥宗光に民党の切りくずしを行かせたのである。

自由党側に、第一回議会をたちまち解散するのは、立憲政治運用能力のないような印象となる故、事なきを得たいという表向きの空気もあり妥協の機運が動いていた。91年（明24）2月20日、いわゆる「土佐派の裏切り」が行われ、土佐出身議員の一部が衆議院の議決前に、予算案の政府同意を求むべしという吏党側提案に賛成投票し可決してしまう。その軟化した二十九人は自由党を脱し自由倶楽部を結成、こうして政府と妥協をはかろうとする軟派が多数をしめるに至り、政府と協議の上、あらたに妥協的な予算修正案が作成され、3月2日可決されたのである。

紫琴の「口と心一子供正直」はいわゆる「土佐派の裏切り」当日より前の文章であるが、すでに鼻薬、黄金水の切り崩し工作を察知し、「民力休養」の民党の予算案の妥協的組み直しを予想したものであり、政費節減の民党の官費流用も容赦なく暴く。こうした帝国議会における民党の墮落と敗北とを、奥様、姑の日常茶飯と並べて論じたところが紫琴の手柄である。ここに議会政治にたいする紫琴の精一杯の冷嘲を読まぬわけにはいかないだろう。

さらに「草紙の変化」（同・2/14）は、予算案をめぐる妥協工作に壮士が横行した事件を扱う政治小説であって、紫琴の諷刺の才能をかいまみせる。

以下は砂糖屋の庭の木立の中に、二、三十人の壮士がひそんでいるのを発見した小僧が、来談中の主人に身の危険を知らせるところである。

「……実はこの小僧めも、およばずながら平素旦那の御愛憐<sup>おななげ</sup>を蒙る身、委しい事は存じませねど、この頃は何でもお仲間中でも、餡の事についていろいろとおせり合ひがあるとの事承ってお

りましたから、旦那のお商売の、菓子屋に縁のある、砂糖屋から、今夜呼びに参ったは何でも、餡についてのお相談と、ヘイヘイ憚りながらお察し申し上げましたが、それについてふとこの砂糖屋の聲は、旦那と反対で、餡を柔らかくしやうといふ方の菓子屋だといふ事を思ひ出しましたから、コイツ今晚は何でも油断が出来ぬと思ひまして、前刻<sup>マタ</sup>から氣を注けておりますと、むこふの木影の方がザワザワといふ様でございますから、ハテナと透かして見ますと、サア今来るぞヨイカ、イヤ今のは違ふ、この次のが越后屋の主人だ手際よくヤレなど申す声が聞こへましたから、さてこそ大変と、急に旦那をお呼び申したのでござります」

と一部始終を物語れば、剛氣の主人クワッと怒り直ぐに当家の主人を呼び立て、  
「大同団子の問屋、五等白砂糖の本家ともいふ大家の主人が、庭内に壮士を伏せて、菓子屋の一人や二人を傷つけやうとは何事です、餡の硬い柔らかいは、我々菓子屋仲間銘々の考へで極めるもの、砂糖屋のそこにはいらざるお世話、餡が硬からふが、柔らかからふが、そのもとはその専売の、五等白さへ売れてゆかばよいではないか、娘の縁にひかされ砂糖屋のいらざる差し出、菓子屋の喧嘩は菓子屋に任しておきなさい、シテ庭内の壮士はどうなさるつもり……、指一本でも私に触れさすやうな事があっては承知できぬ、サア今私の目の前で、キリキリ壮士をお退かしなさい」

菓子屋ながら甘口ならぬ詰問に、砂糖屋の主人が困り切り、  
「イヤ私はちょっとも知らぬ」云々と白をきりひとしきり弁解するが、聞かれぬとわかると「昔から不思議な事はいくらかもあり、画いた虎が脱けて出た例もあり……多分あれも、昼間子供等が、梢に乾して置いたそうしがそうしに化けたのでなござろう」といひしとぞ、という結末となる。

「餡の事」はいうまでもなく「案の事」すなわち予算案であることは明瞭である。「餡を柔らかく」する方は軟派にあたる。「大同団子の問屋、五等白砂糖」は大同団結運動の元締、後藤（象二郎）伯、菓子屋、越后屋主人は招かれて妥協工作をしかけられた民党議員である。どうやら密談は失敗だった模様。「草紙」が「壮士」に化けたという言いのがれの、そのゴロ合せの面白さで、政府の妥協工作、政党政治の腐敗を揶揄したものである。

紫琴が評論でいかんなく示す政治的関心、論理的明晰と旺盛な批評精神とが、当時の女性にはめづらしい諷刺的作品となった。

それは、「ししゃくとししゃくとが出て、双方議論した末が、五分五分で済んだ」から、合計「八尺一寸」だ、といったような貴族院にたいする嘲罵ともなる。

## 政治への絶望

紫琴がいわゆる「土佐派の裏切り」を現実知ってのちの評論は「誰が田」（'91・2/28）である。軟派だの土佐派だのを暗示する言葉はもはやない。紫琴の民党政治家に対する不信と絶望とは大きくひろがっている。

国用節すべし民力休養せざるべからずとは、目下我が国の志士達が、銘々口にせらるるところなれど、さりとてこの人々をして、第二の内閣を造らしめなばいがあるべき。果たしてよく政費を大節減せらるべきか、はたまた人民の心を慰めらるべきにや、儂<sup>おなみ</sup>はかつてかの志士といへる人々が、政党の運動費として得たる金を、己が奢に費やしたるを知る、また地位の為権勢の為には、多年の知友も相分裂して、大合同をなし得ざるを知る。されば第二の内閣を組織したりとていかでか、俄に私欲を去り、私利を捨て、単に国と民との事のみを慮<sup>おもんばか</sup>らるべき、冗費節減も覚束なきものなり、民力休養も当てにならず、甲に虐げらるる代はり、乙の餌となるならば、人民にとりては有難くも何ともなき仕合はせなり。さればこそ志士と唱れる人々が、眉を逆立て、口を尖らし、我こそ国の為に死す、我こそ民の為に身を犠牲<sup>いけにえ</sup>になしつと誇るも、商人は算盤を取りて差引勘定なしといひ、百姓は鋤<sup>かた</sup>を担<sup>おし</sup>げて、私ヤハア、国が出来ても、肥<sup>こやし</sup>にヤァなり申さぬと、つぶやく。これらの言咎むべきに似たれども、かれ取って代はるべし的政治家、利己主義の志士に対しては実に相応はしき返辞ならめ。ああ勝つも負くるも、水と水、火と火、いづれ吾人が迷惑ならぬはなければ、吾人は別に覚悟をば、定めねばならぬなり。

かつての志士、藩閥政府攻撃の先鋒、民党の代議士が政権をとったところで、現状には何の変革をももたらさないであろう。甲が乙に変わったとて、本来が私利私欲にかたまつた同一物の交替なら、人民にとっては無益無関係である、という民党勢力への鋭い批判には、すでに政治というものに何の期待もいだきえない暗澹たる紫琴をみることができる。

土佐派の裏切りに痛憤やるかたなく「衆議院、かれは腰を抜かして、尻餅をつきたり……無血虫<sup>むけつちゅう</sup>の陳列場、已<sup>や</sup>みなん、己<sup>のし</sup>みなん」と罵って議員をやめてしまったのは、中江兆民であった。議会政治、民党議員にたいする紫琴の絶望は兆民におとるものではなかったろう。「百姓は鋤<sup>かた</sup>を担<sup>おし</sup>げて、私ヤハア、国会が出来ても肥<sup>こやし</sup>にヤァなり申さぬ」と諧謔をまじえて語る紫琴の絶望は、土佐派のメンバーに、植木枝盛が加わっていたことで、はかり知れないものがあつたはずである。

『東洋の婦女』に序文を寄せた前後から、女権論、家族制度改革論において民権派随一の論客だった植木は、紫琴のいわばみちびきの星であったが、今や軟化議員として地に落ちた。かつて家庭内小君主、家父長専制のあるかぎり「二十三年国会の開催も妾等姉妹において何かあらん」といった紫琴である。植木の助言を容れて国会開設をいっとき優位においたと思われるかつての訂正は、やはり無意味だったのである。明治の近代、後進国資本主義体制確立の過程に、いっさいの望みを絶たねばならぬという惨敗の思いは、これまでにない深い挫折感を紫琴に味わせたとと思われる。

## 第二章 敗北の行程

### 苦しみて腸も裂けなんとす

紫琴が大井憲太郎の子を出産したのはその年、91年（明24）11月26日である。身籠ったのは1月

末から2月初め頃とすれば、「草紙の変化」など、一連の軟派諷刺が書かれた時期である。

大井憲太郎は国会開催前に旧自由党三派の連合した立憲自由党内にあって、当時、党機関紙とは別に「あづま新聞」を発行（'90・12/21）した。党議員が院内活動に終始し、人民を忘れ政府当局に買収された土佐派の裏切りには、むろん激しく批判的であり、党員の院外活動の推進を唱えていた。自由党を中等以上の有産階級の議院政党とするのではなく、勤労者平民に足場をおいて普通選挙をかちとり、代議士専制を排して院外活動を活発化する構想をたてている。

植木枝盛に失望させられた紫琴が、自由党左派大井憲太郎の動きに注目していたとしても不思議ではない。出獄の歓迎会以来、また景山英子と同行の機会を通して、紫琴はすでに大井と面識があったはずであるから、この頃急速に接近したという可能性は充分考えられる。

しかし、ほとんどの論者がそう考えているように、紫琴はこのとき大井と「恋愛」したのであったろうか。紫琴が大井の子供をもうけた事実があるため、そのように解釈しがちだけれども、そういう根拠はない。

景山英子と寝食をともにした共同行動のなかで、大井と景山との関係が察知できぬほど紫琴は鈍感な人ではない。天保十四年生まれ、当時49歳の大井と紫琴（25歳）とは、父親ほどの年齢差もあった。政治問題のうでで急速な接近がありえたとしても、理性的な紫琴がそのとき前後不覚に燃えあがったとは考えられない。ひとつの証拠は「誰が田」のなかにある。

「かつてかの志士といへる人々が、政党の運動費として得たる金を、己が奢に費やしたるを知る」という一節がそれである。「かつてかの志士」という特別な強調、「運動費として得た金」といういかたを注意すれば、これが大阪事件の公金費消を指すことはほとんどまちがいない。下部党員が強盗まで働いて得た（透谷はこのとき大矢正男の誘いを断って髪を剃った）血の出るような運動費が、酒色に浪費されたことは『妾の半生涯』に詳しいから、著者景山英子の口を通して、紫琴の耳にも当然達していた事実であろう。そうだとすれば、紫琴の「誰が田」の一節は、大阪事件の主謀者大井憲太郎らへの批判も含んでいたわけで、政治的な接近がたやすく恋愛に移行するためにはブレーキとして働いたことだろう。さらに、紫琴が大井と渡りあって手づよい反撃に出る場面を語る川合山月の文章がある。

その頃の自由党といえば、星亨と大井憲太郎の二大勢力が対立していた時分だが、或る日彼女はこの大井の許へ会いに行った。もとより大井は一方の旗頭、壮士の子分も多く人々からも恐れられている存在である。それがどう話がこじれたのか、何かの事で大井は感情を害し鋭い口調で吐き捨てるように言った。

「あんたは少し優れた婦人かと思っていたが案外当り前の人ですな」

壮士の親分であり、自由党の大勢力家の彼のことだ。普通の女性なら癡易するのが当然である。ところが彼女はそういう相手を真直に見つめながら、涼しい顔で悠然と答えた。

「そうですね、庭から眺める月も便所の窓から眺める月も、月はおなじですからね」流石の大井もこれには一言もなかった。

次の間で聞いていた壮士達は齒がみして悔しがったが、そう言い捨てゝととと出て行く彼女を黙って見送るより外はなかった。

川合山月は『女学雑誌』時代の紫琴が信頼した同僚であって、「殆んど兄妹ともいうべき間柄にあった<sup>(26)</sup>」という。以上のエピソードは山月に紫琴が自ら語ったものである。嘘や粉飾の必要があったとも考えられない。とすれば、こうした情景から想像しても、大井と紫琴との間にまもなく恋愛関係が生じたようには思えないのである。

さらにいえば、もしも紫琴が大井憲太郎を本当に愛していたとするなら、懷妊を知ったことであれほど苦悩するはずはないであろう。

次に掲げるものは川合山月にあてた書簡である。紫琴は91年（明24）4月、老父の病状が悪化したとの知らせを受け、急遽京都伏見へ発つが、『女学雑誌』の用務を兼ね、在京の山月と取り交した書簡の一部である。

川合信水宛 明治24年5月1日附<sup>(26)</sup>京都伏見京町八丁目八番戸清水謙吉方とよ拝

嗚呼去年の今月は多くの希望と奮発心を齎して勇心勃々出京致し候ものを、今年は孤燈蔭暗き辺に在京の諸師友を憶ひ又病める父、憂へる妹が今後の運命如何あらむと苦慮し隙洩る風消えかゝる燈に魂を冷さんとは、去ながら這回の事だに妹が精神上の歴史に一大変化を来すの媒たるものにして、今や紛擾煩悶極まりなき時に有之世人は之れを蹉躓とも見れば見ぬ、妹が心には一大解脱の時機遠からずして来るものと確認致居候、あゝ冀くは愛する我親友よ、兄弟よ、妹が運命の日々沈みつゝ行くことあるも必ず心を勞し玉ふことなく、妹が今日大いに沈むは他日一大進化を来すべき摂理と看做し玉ひ、此悲境に陥りしを放念し玉へ、申し上度事ハ多有之候へ共心緒紛乱筆紙に尽すべくもあらねば何事も相略し申候、負ふ所多き者には必ず多くの難問を与へらる……

老父看病のための帰京にしては、「蹉躓」「紛擾煩悶」「運命の日々に沈みつゝ行く」「心緒紛乱筆紙に尽すべくもあら」ずなど、深刻な表現が多すぎるのである。しかも、「何事も相略し申候」とあって、起因する具体的事情はいっさい書かれぬままという不自然さである。「心緒紛乱」とは何であるか。しかし、次第に見当がついてくる。

……願はくは愛兄妹が疎懶の罪を妹に代りて女学雑誌と巖本先生に償ひ玉はむ事を偏に乞ひまつるなむ、あゝ妹は今や種々の病苦に遭ひ心神殆んど暗むる計なるも幸に友愛無上の愛兄のあるなり、……故に妹は悩める中憂ふる間にも非常に心強き心持するなり、回憶すれば去年妹の初めて愛兄に逢ひし時、愛兄に妹は傲慢なりとの御感を与へしも今や妹は愛兄の前に最も弱く最も憐れなる一女子とはなり了りぬ……（5月5日夜）

「種々の病苦に遭ひ心神殆んど暗むる計」なのは、病父であるより紫琴自身の病苦であることがわかる。そのため彼女は「最も弱く最も憐れなる一女子」に転落しているのだ。はじめて見せる紫琴のこころ弱い惑乱の姿である。休職の手続をとるために紫琴はやむなく一時上京するが、「心中の苦はなかなか其万分の一をも詞に尽されず、同夜はさまざまの思ひに悩まされ通宵睡ることを得侍ら」ざる状態であった（5月27日晚）。京都に帰ってからの苦悩はさらに激しく、紫琴は床にいたままであった。

日々筆は採りかけても思ひ迫りて直に昏倒せんとする気味あり昨今漸く快く相成候、此間よりくさぐさ思ひ居しまゝを乱筆ながらもらし候、文言もあとやさきにて御分にくゝ候はんが、御推読願ひ上候、おちぶれて袖に涙のかゝる時人の心の奥ぞ知るゝと古人は言ひしが、妾は今や苦しみて腸も裂けなんとする時に兄弟の愛のなみなみならぬを知りたる……（5月27日晚）

「思ひ迫りて直に昏倒せん」ばかりの、「苦しみて腸も裂けなんとする」という、この異例な苦悩は、もはや何かは想像がつくのである。時期から考えて、はっきりした懐妊の兆候が原因であろう。それが不本意な懐妊であればこそ、これほどの「苦獄」を経験したのである。この時はじめて、紫琴にはキリスト教が身近に感じられている。遂に入信には到らないで終るが、あの剛毅な精神がキリスト教と向き合わねばならぬまでに破碎され、救済を求めたことから、紫琴が大井との恋愛を体験したとは到底思えないのである。

七月になってからの書簡を読むと、紫琴は最初の結婚で子供を産んでいたらしく、それが清水家の本家に養育されており、父親は紫琴をもそこへ托してあらためて「昔風の女らしき女」に造りかえる心算のようだ、と告げている。娘の妊娠を知った父親の決断である。しばらく父の申すままに致す覚悟だ、と紫琴は書いている。

……事茲に至りしも強ち父のみを咎め難く素ともと私の悪しき故てふ事は万々悟り居候事も有之候を以て何も角もあきらめ居候、私の挙動謹慎ならざりしは即ち父が此強制を行ふの機会を發動したるものにて所謂藪を叩いて蛇を出したるものに付実に小心翼翼は人間の大事=殊に婦人にありては必要なることとてふことを今更切に相感じ申候、私の如く兎角奇を好み磊落疎放などいふ事を快とし、よしなき諧謔に出て言詞を弄しなど致たるは洵に良しなき事にて、是等の事皆他人に誤解さるゝの源となり、……只々この身の疎放奇矯に失しゝ事を悔ひ候、今回の事の為め非常に事業並に学業は沮滯いたし候へ共、為めに自分の欠行を見出し、又今日迄の失策を悔悟するの念も熾んに相成候故、若此后再び雲雨を得て池中を出るの時あらば其時こそは真正温良なる女子として順道を踏み、諒々乎として万人に接するの覚悟……（7月2日）

女壮士、女傑清水とよの名をほしいままにした紫琴、才気縦横、大胆豪気なる紫琴が、「真正温良なる女子として順路を踏み」などという言葉をつらねるのをみると、憐れがこみあげてくる。彼

女をこれほどまでにこころ弱くし、踏みくだいた犯人は大井憲太郎である。

「私の挙動謹慎ならざりし」こと、「この身の疎放奇矯に失しゝ事を悔ひ」「失策を悔悟」するのである以上、懷妊にいたる情交が、紫琴のこころから望んだものでなかったのは明瞭であろう。

「磊落疎放などといふ事を快とし、よしなき諸謔」を弄しなどして、男達の酒宴に混り、対等にわたり合って、したたかに飲んだ或る夜の不覚ではなかったか。情慾の男女同等を、おくせずに主張してきた紫琴であれば、遊蕩をほしいまな男壮士に、いささか挑戦の気味さえあったすえの不覚かも知れない。女の身体が引き受けねばならなかった不条理である。

川合山月によれば、後年の紫琴はつねづね「御酒だけは飲まぬようにしたい」と語っていたという。「身傷けられ」という後の書簡をみれば、これを明瞭にレイプというべきか知れぬ。

ともかくも、この懷妊から出産後にかけて、紫琴の生涯の大きな危機があったことだけは事実である。大井の子家邦の誕生はこの秋91年（明24）11月26日である。紫琴の兄謙吉の養子として育てられたが、紫琴は出産ののち翌年の秋ごろまで病床に伏し、入退院をくりかえしている。

やがて、兄謙吉が助手として勤務した農科大学（東京帝国大学）の助教授、古在由直と結婚することになる紫琴は、「失意落魂の極に陥り、身傷けられ名汚さる」という書簡を由直宛に送っている。紫琴は自分の過去を隠そうとしなかったようである。残された由直の書簡を読む時、稀な青春の情熱を注いでくれたこの学究の出現は、紫琴の傷痕をいくばくか癒しなぐさめたにちがいないと思う。じじつ巖本善治若松賤子媒妁による二人の結婚は、周囲には非常な幸運と思われたようである。しかしながら、次のような苦悶の文章を何と読むべきであろう。

たとひ終身を沈黙に埋没し、一生を孤棲にかぎり、百年相見を禁じらるるとも、もし我に信を托し我に身をゆるす人ありと思はば、それを固く望みにして断えざるの苦痛を忍ぶべし、しかしながら遠慮なく泣きたきほどに泣き、訴えたきほどに訴え、何の容赦もいらぬほどに我が心を紙にうつすことを得きべ世界はいつこぞや、夜はただ与えられし自由の界、ここに自由に夢みんとすれども、もしや夢中に叫びて人を驚かすことのなきや、ああもっとも早く我が心を知れる涙よ、もっとも深き所より我が心をくみ出す涙よ、卿の自由に流れてわが心を解かんとするをだに忍びざるべからざるの世の中か、ああ、ああ忍びざるべからざるの世の中か。

（「夏子の物思ひ」1901.1.25）

内にせめぎ合う表現の欲求が抑圧されるためのこれほどの苦痛と悲嘆——紫琴の結婚生活とは、遂にこういう代償の要求されるものであった。

「決して帰<sup>とつ</sup>がじとの決心なかるべからず」とつよく訴えた人が、いくたの挫折と苦しみの果てに強いられた無念の沈黙、その敗北の行程と構造とがさらに詳しくたどられねばならない。

## 註

- (1) 『紫琴全集』全一巻 1983・5/10 草土文化社
- (2) 山口玲子『泣いて愛する姉妹に告ぐ——古在紫琴の生涯』1977・8/10 草土文化社
- (3) 「明治の女—清水紫琴のこと」1968稿 全集所集『人間讃歌』岩波書店
- (4) 竹末勤「清水紫琴と奈良における演説活動」『奈良近代史研究会々報(7)』1981・8
- (5) 北田幸恵「女権と文学の間—古在紫琴論—」『北方文芸』1984・8
- (6) 『日本近代思想史研究』1953・12
- (7) 家永三郎『植木枝盛研究』1960・8/25 岩波書店
- (8) 「清水紫琴の『平権』運動」『奈良近代史研究会々報(38)』1986・9
- (9) 稲田正次氏蔵 武田清子「清水紫琴と移民学園」『土着と背教』
- (10) 『奈良県近代史史料(1) 大和の自由民権運動』
- (11) 前掲(3)に同じ
- (12) 前掲, 北田, 竹末論文参照
- (13) 村田静子『福田英子』岩波書店 1950・4/17
- (14) 前掲(8)に同じ
- (15) 署名の秋玉は清水とよのペンネームであることがわかっている。瀧氏は不明。竹末論文は二人の共同執筆とするが、論調からみて執筆者は女性一人と思われる。当時の石田たかの文章などくらべて格段の差があり、これほど明晰な論を立てうるのは、紫琴以外にないと思われる。
- (16) 湯浅はつ編集発行のパンフレットで、対嶽人・人見太郎著「倫理の基」の忠実な要約、定価二銭、民友社、女学雑誌社、警醒社発売
- (17) 『日本婦人論史(上)女権論篇』ドメス出版 1986・7/1
- (18) 建白の企画者たちが批判を受け入れ基督教の一項を削除したことは石田たかの投書(東雲新聞)によって明らかだとされる(外崎光広 右同書)
- (19) 外崎光広 (17)に同じ
- (20) 野辺地清江『女性解放思想の源流—巖本善治と『女学雑誌』—』校倉書房 1984・10/1。国家主義的良妻賢母思想と比較し、個人主義的、自由主義的良妻賢母思想を「前期」として区別している。
- (21) 駒尺喜美「紫琴小論—女性学のアプローチ」1983・5『紫琴全集』
- (22) (21)に同じ
- (23) 古在由重・小林登美枝『愛と自立—紫琴・らいてう・百合子を語る』(大月書店 1983・2/24)における小林の発言
- (24) 「清水紫琴 人と文学」『近代短篇 女性文学』桜楓社 1987・4/6
- (25) 川合道雄「清水とよ子と山月子」『川合山月と明治の文学者達』
- (26) 以下の清水とよ書簡は川合道雄氏所蔵のものを御好意により閲覧した。

\* 本稿は第二章の中途であるが、枚数制限のため続稿は別誌に掲載の予定